

テスト不安に関する教育心理学的研究 (Ⅱ)*

—— テスト不安と学習適応性を中心に ——

今 林 俊 一・島 田 俊 秀**・井立田 章 子***

(1988年10月15日 受理)

An Educational Psychological Study on Test Anxiety (Ⅱ)

——Test Anxiety and Academic Adjustment——

Shunichi IMABAYASHI・Toshihide SHIMADA・Shouko ITACHIDA

1. 問題と目的

児童生徒の学業達成の面では、教示方法と交互作用する学習者の個人差のあることがこれまで強調されてきている。学習者の特性について、坂元ら(1978)⁽⁴⁾は、(1)創造性、好奇心、認知スタイル、知的達成の原因帰属の傾向性などの学習者の認知的特性と(2)不安や社会的地位などの学習者の社会的・情緒的特性とに整理している。その中で、情緒的特性については、近年、測定法の開発とも関連して、状態不安と特性不安に関する研究、テスト不安に関する研究などとして数多く報告されている。

テスト不安に関する研究は、マンドラー(Mandler, G.)とサラソン(Sarason, S. B.)らのイエール・グループによる作業と不安に関する考え方を基本にしている。テスト不安は作業と関連性、すなわち、作業遂行を促進する効果と抑制する効果のあることが示されており、特に、課題の困難度や課題に対する自我関与の程度が増すほどテスト不安は作業を抑制するように作用するということが明らかにされている。また、テスト不安の形成(三根ほか, 1985⁽⁷⁾;高橋, 1983⁽¹⁷⁾など)やテスト不安の性差(荒木, 1977⁽¹⁾, 1978⁽²⁾, 1981⁽⁴⁾;小川, 1976⁽¹¹⁾など)、テスト不安と知能・学力との関係(荒木, 1978⁽²⁾;三野, 1984⁽⁸⁾;上田, 1968⁽¹⁸⁾, 1970⁽²⁰⁾;山本ほか, 1985⁽²¹⁾など)、テスト不安と人格的特徴(山本ほか, 1985⁽²¹⁾など)など、多方面から数多くの実証的研究報告もなされている。このような中で、下山(1983)⁽⁶⁾は、「テスト不安の抑制効果は、学校における達成行動(学業)についても見出されており、学業促進のためにテスト不安を軽減、治療しようとする方

* 研究は、池田浩(鹿児島県出水郡野田小学校教諭)らとの共同によるものである。

** 鹿児島大学教育学部心理学科

*** 鹿児島県揖宿郡喜入小学校

法の検討や試みが、近年アメリカで、なされるようになってきている」と述べており、テスト不安の研究動向は、より教育実践的・治療的色彩を濃くしているといえよう。

ところで、児童生徒が自分自身や周囲のことを生かしながら諸課題に積極的に取り組める状態かどうかは教師の指導効果に直接的間接的に反映すると考えられており、彼らの学習への適応状態(水準)を十分に把握することは、教育実践において、必要不可欠な条件とされている。その中で、児童生徒が本来持っている能力に応じた学業達成の難しい場合は、学習不適応状態が考えられているが、その原因としては、児童生徒の主体的要因と彼らを取り巻く環境的要因があげられる(テスト不安は、児童生徒の主体的要因の一部と考えられている)。一般に、児童生徒は、受けるテストの種類ややり方に関連して、上手に出来るかどうかを心配したり、テスト場面から逃れたいという感情や失敗を恐れる気持ちなどといった種々なテスト不安に接することが多いといえよう。しかしながら、児童生徒の学習意欲や態度、自分自身の知的達成の原因の見方など学習への適応状態(水準)によって、各テスト不安の受け止め方も多様化していることが想定される。

そこで、本研究では、児童生徒、特に、中学生の学習適応性を明らかにし、テスト不安との関わりを検討することを目的とする。なお、学習適応性で明らかにする観点としては、学習態度、学習技術、学習環境、精神・身体の健康といった4つの観点における適応の仕方、知的達成の原因帰属の傾向性、認知スタイル、成就値などである。

2. 方 法

2. 1. 調査対象

鹿児島県内の公立中学校3年生、計542名(男子287名、女子255名)。なお、調査対象者の所属する地域は、鹿児島県K市内中心部から1校(以下、A中学校)222名(男子117名、女子105名)、K市内新興団地から1校(以下、B中学校)234名(男子123名、女子111名)、I市内近郊農村部から1校(以下、C中学校)86名(男子47名、女子39名)を無作為に抽出した。

2. 2. 調査期日

1987年5月～9月。

2. 3. 調査場所

全ての調査は、生徒の所属する各教室内で実施した。

2. 4. 調査材料

2. 4. 1. テスト不安の質問紙

サラソンらの作成したテスト不安尺度(Test Anxiety Scale for Children, 以下、TASC)を

もとに, 日本の教育の実情や児童生徒の理解の程度を考慮して, 荒木ら (1985)⁽⁶⁾が作成した中学生版テスト不安検査を使用した。この検査は, 児童用テスト不安検査 (荒木ら, 1979)⁽³⁾を中学生の実態に合わせ, ひらがなを漢字に改めたり, 算数を「数学」に, 国語を「英語」に改めるなど, 内容に変化を生じさせない範囲で若干の修正を加えたものであり, 不安尺度31項目と虚偽尺度4項目, 計35項目から構成されている。

2. 4. 2. 学習適応性の質問紙

応用教育研究所 (1987)⁽³⁾の作成した教研式新版学習適応性検査, 中学用, (NEW-Academic Adjustment Inventory, 以下, NEW-AAI) を使用した。この検査は, 学習適応性を測定する12の下位テスト (120項目) から構成されており, これらの下位テストはさらに, 以下のように, 4つの領域にまとめられている。

領域Ⅰ: 学習態度

1. 勉強の意欲
2. 勉強の計画
3. 授業のうけ方

領域Ⅱ: 学習技術

4. 本の読み方・ノートのとり方
5. 勉強の技術
6. テストのうけ方

領域Ⅲ: 学習環境

7. 家庭環境
8. 学校環境
9. 友人関係

領域Ⅳ: 精神・身体の健康

10. 自主的態度
11. 根気強さ
12. 心身の健康

このほかに, 応答の一貫性, 原因帰属, 学習スタイル (認知スタイル), 実態調査, 要求水準 (自己評価) についての5つの下位テスト (30項目) も参考尺度として構成されている。

2. 5. 手続き

テスト不安検査は, 学級担任の監督の下で一斉に実施した。質問紙への回答は, 各項目に対して, 「はい」「いいえ」の2件法で評定させ, 31項目の不安尺度項目に対して「はい」という回答に, 1点を与えた (合計得点: 0点~31点)。

NEW-AAI は, 手引きの実施法に従って, 学級担任の監督の下で一斉に実施した。NEW-AAI の回答の得点化は, 全て, コンピュータによって処理された。なお, 学習適応性に関する下位テストへの回答は, 全て, 3件法で評定させ, 学習に対する態度や環境などで望ましい選択肢の方から2点, 1点, 0点を与えている (各下位テストの合計得点: 0点~20点)。

2. 6. 処理

テスト不安の得点は, 31項目の不安尺度項目への「はい」という回答の合計数で表示されている。また, 虚偽尺度項目について, 虚偽尺度の得点が2~4点の生徒の回答は信頼性を欠く (荒木ら, 1979)⁽³⁾ので, 本研究では, 虚偽尺度得点の0~1点の生徒の回答を有効回答として統計処理

に用いた。

NEW-AAIの結果資料の中では、応答の一貫性を見るために、対になる質問項目を5つ設け、各質問の対ごとの得点のずれを求め、そのずれの絶対値の合計得点を求めている。そして、合計得点の4~10点の生徒の回答は、一貫性の乏しい(応用教育研究所, 1987)¹³⁾ので、本研究では、合計得点の0~3点の生徒の回答を有効回答として統計処理に用いた。

また、生徒の学習適応の水準をAAI偏差値に基づいて群分けし、「低適応群(AAI偏差値:44以下)」「普通群(AAI偏差値:45以上54以下)」「高適応群(AAI偏差値:55以上)」とした。

さらに、生徒の知能・学力のバランスを考慮するための成就値に基づいて群分けし、オーバー・アチーバー群(成就値:+7以上;以下, O-achi群), バランスド・アチーバー群(成就値:-6以上+6以下;以下, B-achi群), アンダー・アチーバー群(成就値:-7以下;以下, U-achi群)とした。

なお、調査対象542名のうち、統計処理に有効な回答は、A中学校175名(男子91名, 女子84名), B中学校209名(男子110名, 女子99名), C中学校74名(男子42名, 女子32名), 計458名(男子243名, 女子215名)であった(有効回答率:84.50%)。

3. 結 果

3. 1. テスト不安と地域差・性差について

表1は、テスト不安得点を地域別・性別に示したものである。その結果、性差のみに主効果が認められた($F=37.31$, $df=1/452$, $P<0.001$)。さらに、性差について、地域別に検定を行った所、各校とも、男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた(A中学校: $t=4.09$, $df=173$, $P<0.001$; B中学校: $t=3.93$, $df=207$, $P<0.01$; C中学校: $t=3.44$, $df=$

表1 テスト不安得点と地域差・性差

地域	男 子			女 子		
	人数	平均値	S D	人数	平均値	S D
A中学校	91	11.30	4.50	84	14.35	5.31
B中学校	110	12.32	5.28	99	15.20	5.24
C中学校	42	10.86	4.52	32	14.50	4.34

72, $P<0.01$)。

3. 2. 学習適応性と地域差・性差について

表2は、学習適応性の得点(偏差値)を地域別・性別に示したものである。その結果、地域差、性差に主効果が認められた(地域差: $F=12.54$, $df=2/452$, $P<0.001$; 性差: $F=11.53$, $df=1/452$, $P<0.01$)。地域差について、男女別に検定を行った所、男子にのみ主効果が認められ

た ($F=9.02$, $df=2/240$, $P<0.001$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, A中学校>C中学校, B中学校>C中学校間に有意差(5%水準)が認められた。性差について, 地域別に検定を行った所, B中学校とC中学校において, 男子に比べて女子の方の学習適応性の得点が高いという結果が認められた(B中学校: $t=2.49$, $df=207$, $P<0.05$; C中学校 $t=2.63$, $df=72$, $P<0.05$)。

表2 学習適応性の得点と地域差・性差

地域	男 子			女 子		
	人 数	平均値	SD	人 数	平均値	SD
A中学校	91	52.59	10.95	84	54.16	10.02
B中学校	110	50.04	10.00	99	53.44	9.60
C中学校	42	44.38	9.59	32	50.03	8.20

3. 3. 学習適応性とテスト不安について

学習適応性については, 学習態度, 学習技術, 学習環境, 精神・身体 of 健康という4領域別の適応性とそれら4領域を合わせて全体的な学習への適応の仕方という5観点から検討を行った。

表3は, テスト不安の得点を5つの観点から学習適応の水準別に示したものである。その結果を観点ごとに示すと以下ようになった。

表3 テスト不安得点と学習適応性・性差
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

学習適応	性	人数	全体適応	学習態度	学習技術	学習環境	精神身体
高適応群	男子	87	10.84 4.77	10.92 4.81	11.13 4.48	11.01 4.89	10.93 4.99
	女子	94	12.91 5.03	13.98 5.13	13.06 5.08	13.56 5.23	12.11 4.46
普通群	男子	88	12.18 4.85	12.55 5.23	11.87 5.31	12.35 4.55	11.63 4.51
	女子	77	15.93 4.64	14.58 4.85	16.19 4.53	15.65 4.87	15.55 4.92
低適応群	男子	68	11.96 5.21	11.92 4.77	11.80 4.86	11.43 5.65	12.10 5.38
	女子	44	16.57 5.10	16.37 5.30	15.21 5.59	16.77 4.55	16.57 5.22

全体的適応性では, 学習適応性, 性差ともに主効果が認められ, また, 交互作用も認められた

(順に, $F=10.22, 52.90, 2.44$; $df=2/452, 1/452, 2/452$; $P<0.001, 0.001, 0.10$)。学習適応性について, 男女別に検定を行った所, 女子のみに主効果が認められた ($F=11.69, df=2/212, P<0.001$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, 高適応群<普通群, 高適応群<低適応群間に有意差 (1%水準) が認められた。性差について, 学習適応の水準別に検定を行った所, 全ての水準において, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (高適応群: $t=2.82, df=179, P<0.05$; 普通群: $t=5.03, df=163, P<0.001$; 低適応群: $t=4.57, df=110, P<0.001$)。

学習態度では, 学習適応性, 性差ともに主効果が認められた (順に, $F=4.18, 42.67$; $df=2/452, 1/452$; $P<0.05, 0.001$)。学習適応性について, 男女別に検定を行った所, 男女ともに主効果が認められた (順に, $F=2.37, 3.31$; $df=2/240, 2/212$; $P<0.10, 0.05$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, 女子において, 高適応群<低適応群間に有意な傾向 (10%水準) が認められた。性差について, 学習適応の水準別に検定を行った所, 全ての水準において, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (高適応群: $t=4.11, df=179, P<0.001$; 普通群: $t=2.56, df=163, P<0.05$; 低適応群: $t=4.57, df=110, P<0.001$)。

学習技術では, 学習適応性, 性差ともに主効果が認められた (順に, $F=5.77, 44.82$; $df=2/452, 1/452$; $P<0.01, 0.001$)。学習適応性について, 男女別に検定を行った所, 女子のみに主効果が認められた ($F=8.55, df=2/212, P<0.01$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, 高適応群<普通群, 高適応群<低適応群間に有意差 (5%水準) が認められた。性差について, 学習適応の水準別に検定を行った所, 全ての水準において, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (高適応群: $t=2.69, df=179, P<0.05$; 普通群: $t=5.55, df=163, P<0.001$; 低適応群: $t=3.39, df=110, P<0.01$)。

学習環境では, 学習適応性, 性差ともに主効果が認められ, また, 交互作用も認められた (順に, $F=5.91, 59.26, 2.96$; $df=2/452, 1/452, 2/452$; $P<0.01, 0.001, 0.10$)。学習適応性について, 男女別に検定を行った所, 女子のみに主効果が認められた ($F=7.29, df=2/212, P<0.01$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, 高適応群<普通群, 高適応群<低適応群間に有意差 (5%水準) が認められた。性差について, 学習適応の水準別に検定を行った所, 全ての水準において, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (高適応群: $t=3.36, df=179, P<0.01$; 普通群: $t=4.47, df=163, P<0.001$; 低適応群: $t=5.21, df=110, P<0.001$)。

精神・身体の健康では, 学習適応性, 性差ともに主効果が認められ, また, 交互作用も認められた (順に, $F=12.67, 45.44, 4.62$; $df=2/452, 1/452, 2/452$; $P<0.001, 0.001, 0.05$)。学習適応性について, 男女別に検定を行った所, 女子のみに主効果が認められた ($F=17.14, df=2/212, P<0.001$)。さらに, ライマン法による平均対の比較を行った結果, 高適応群<

普通群, 高適応群<低適応群間に有意差 (0.1%水準) が認められた。性差について, 学習適応の水準別に検定を行った所, 普通群と低適応群において, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (普通群: $t=5.31, df=163, p<0.001$; 低適応群: $t=4.31, df=110, p<0.001$)。

3. 4. 知的達成の原因帰属の傾向性 (以下, 原因帰属) とテスト不安について

表4は, テスト不安の得点を成功場面・失敗場面についての原因帰属別に示したものである。原因帰属の仕方を成功場面と失敗場面で比べてみると, 両場面とも, 原因の認知を努力に位置づける生徒が非常に多かった (最もその割合の少ない成功場面・男子の場合でも, 61.3%を占めている)。それに次いで多かったのは, 成功場面では課題の難易や運, 失敗場面では能力となっており, 場面によって異なっていた。

ところで, 表4に示されているように, 原因帰属別の該当者数は, かなり偏りが認められた。そこで, 原因帰属を行った生徒の極端に少ないセルは, 統計処理から除いたために, 成功場面では, 努力-課題の難易間, 失敗場面では, 能力-努力間のテスト不安得点の比較を行った。

表4 テスト不安得点と原因帰属・性差

成 功 場 面						
原因帰属	男 子			女 子		
	人 数	平均値	SD	人 数	平均値	SD
能 力	6	9.00	3.58	3	14.00	2.65
努 力	149	11.86	4.92	148	14.74	5.27
課題の難易	58	11.12	4.80	45	14.73	4.83
運	30	12.07	5.52	19	14.74	5.60
失 敗 場 面						
原因帰属	男 子			女 子		
	人 数	平均値	SD	人 数	平均値	SD
能 力	29	13.24	5.06	21	19.29	4.36
努 力	198	11.40	4.77	186	14.32	4.97
課題の難易	12	11.33	6.62	3	11.00	4.36
運	4	12.75	6.85	4	11.00	5.48

成功場面では, 性差のみに主効果が認められた ($F=31.19, df=1/396, p<0.001$)。性差について, 努力-課題の難易別に検定を行った所, 両帰属とも, 男子に比べて女子の方の不安得点が高いという結果が認められた (努力: $t=4.85, df=295, p<0.001$; 課題の難易: $t=3.74, df=101, p<0.01$)。

失敗場面では, 原因帰属, 性差ともに主効果が認められ, また, 交互作用も認められた (順に,

